

『山の音』に描かれている女性たち

―菊子の両面性を含めて―

金 惠 妍

―

『山の音』^(注1)の主な登場人物は六十二歳の尾形信吾、一歳年上の妻の保子、長男の修一と嫁の菊子、嫁に行ったが、二人の孫を連れて出戻りしている長女の房子などである。その他に、信吾において美しい憧憬の人である義姉がいる。信吾自身や彼の一家をめぐる様々な出来事が信吾の視点を通して展開されていくのである。つまり、『山の音』では信吾が内面的に抱えている老いの問題、家長としての存在という大きい二つの問題が扱われているのである。

―

疑わせる箇所が見られるのも事実である。しかし、作品が進むにつれ、信吾に生きることを気づかせる生命の象徴としての役割を果たしていくのである。そこで、川端文学の特徴の一つである主人公の両面性、それを典型的に体現している菊子の問題について、考察を進めてみたい。その上、『山の音』に描かれている修一の愛人の絹子をはじめ、絹子の同居人の池田、信吾の事務所で働く英子の人物像についても触れたいと思う。

そのなかでも、保子の姉と菊子の存在が重要であることは言うまでもない。信吾にとって菊子は、永遠の憧れである義姉の分身のような存在として登場し、舅の信吾と息子の嫁の菊子との危うい関係が描かれている。決して、信吾と菊子の関係は、倫理性を破った恋にまでは至らないが、通常の舅と息子の嫁という関係を

まず、菊子は作中に女主人公としての存在感をはっきりと示すが、信吾が菊子に惹かれる理由は明らかである。それは、「ほつそりと色白の菊子から、信吾は保子の姉を思ひ出したりした」という義姉との重なるイメージからである。実際に、菊子は信吾が「山の音」を聞いたことを話した際に、「お母さまのお姉さまがお

なくなりになる前に、山の鳴るのをお聞きになつたつて、お母さまおつしやつたでせう。」と義姉のことを思い出させるのである。

また、信吾の「菊子が嫁に來た時、菊子が肩を動かすともなく美しく動かすのに氣づいた。明らかに新しい媚態を感じた。」というように、菊子は「美しい肩」で信吾に媚態を感じさせている。その他に、「信吾の思ふやうにならない」修一の愛人の問題、房子夫婦の問題、とそれに子供たちが「思ふやうに世に生きられない」という家庭内における問題で頭を抱えている信吾にとって菊子は、「鬱陶しい家庭の窓のやうな」存在で、「信吾の暗い孤獨のわづかな明り」のやうな意味をもっている。

このように、信吾にとって菊子は様々な意味で重要な人物であるわけだが、その一方で、菊子における信吾の存在はどうなのか。「信吾が菊子を愛するのはよく解る」が、「犯し得ぬ社会的禁忌を超えて、菊子がなぜ信吾に惹かれているか」は謎である。彼女と信吾との会話を通して探ってみよう。まず、信吾から最初に別居の話が聞かれた時の場面である。

「いいえ。私でしたら、お父さまにやさしくしていただいで、いつしよにゐたいんですの。お父さまのそばを離れるのは、どんなに心細いかしれませんわ。」

「やさしいことを言つてくれるね。」

「あら。私がお父さまにあまえてゐるんですもの。私は末

っ子のあまつたれで、實家でも父に可愛がられてゐたせるですか、お父さまとゐるのが、好きなんですわ。」（「夜の聲」四）

ここでの菊子の言葉から考えられるのは、義父である信吾の存在が實家の父と重なっていることである。しかし、慈童の面を被つた際に、修一と「『別れても、お父さまのところゐて、お茶でもしてゆきたいと思ひますわ。』と面の蔭ではつきり言つた。」という言葉をはじめ、菊子は疑わしく読み取れる言葉を言うのである。

また、二度目に別居を勧められた時は、夫と別れても、義父である信吾に「どんなお世話でもさせていただけると思ひますの。」という通常では考え難いことを言っている。それに、年寄り夫婦の家出の新聞記事のことを話す場面では、もし夫の修一と心の中ずるとしても、「お父さまには、なにか言ひ遺したい氣がしますわ。」と言うなど、菊子にとって信吾が義父という関係を越えているのではないかと思わせたりもする。しかし、作品におけるすべての登場人物が視点人物である信吾を通して描き出されていることから、はつきりとした答えは得られない。

その上、信吾に対する氣持をはじめ、作中に見られる菊子の様々な姿も、菊子の本音を読み取ることを妨げている。菊子の登場が、義姉のことを思い出させる形だったことから、どうしても信吾に

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

おける義姉を思い出させる媒体的なイメージが強い。でも、その菊子が作品の結末では、「女はみんな水商賣が出来ますもの」、「お姉さまがなされば、私だってお手つだひさせていただくわ。」と、思いがけない大胆な発言をし、それまでの義姉と重なっていたイメージをひっくり返すのである。このような菊子の著しい変貌は、突然の出来事のように見えるけれども、作中には早くからその展開が密かに暗示されていた。

まず、挙げられるのが菊子の墮胎で見せた強い意志である。菊子は結婚してまもなく二年になるがまだ子供がいない。勿論、保子と信吾が孫を楽しみに待っていることは承知である。しかしながら、菊子は初めて出来た子供を、修一に愛人が居る限り、産まないと言吾たちに黙って自分の意志で子供をおろしてしまった。この出来事から、私たちは「菊子の魂は、なかなかあれで、強情」であることを窺い知ることができる。また、房子が保子の実家である信州に帰ったことを知った際に、「あの菊子だつて、逃げ出さないとは限りませんよ。」という保子のさりげない一言も、菊子の意思の強さを密かに記している個所である。

それに、信吾から「菊子は自由だ」と言われたことから何らかの影響を受けたのだろう。

「さう。菊子は自由だつて、わたしから菊子に言つてやつてくれと、修一が言ふんだ。」

この時、天に音がした。ほんたうに信吾は天から音を聞いたと思つた。

見上げると、鳩が五六羽庭の上を低くななめに飛んで行つた。

菊子も聞いたらしく、廊下の端に出ると、

「私は自由でせうか。」と鳩を見送りながら涙ぐんだ。（「秋の魚」四）

このような過程を経て、菊子は優しく美しい表の姿の裏に隠されている、強い意志を持った女性の姿に入れ替わっていくのである。それがはっきりとした形で表れたのが、最終章での思いがけない発言をする場面である。

房子はうつ向いて小ぜはしく口を動かしてゐたが、改まつて言つた。

「お父さま、私になにか小さい店でも持たせていただけませんか？ 化粧品店でも、文房具屋でも……。どんな場末でもいいわ。屋臺かスタンドの飲み屋がやつてみたいわ。」

修一がおどろいたやうに、

「姉さんに水商賣が出来るの？」

―中略―

「お姉さまにもお出来になりますわ。女はみんな水商賣が出

來ますもの。」と菊子が思ひがけなく言ひ出した。

「お姉さまがなされば、私だつてお手つだひさせていただくわ。」

「へええ、これはえらいことになった。」

修一はおどろいてみせたが、夕飯の場はしんとしてしまつた。(「秋の魚」五)

保子の義姉との関連性からスタートしていた菊子のイメージからは、誰も予想できなかった言葉である。菊子のその言葉は彼女が新たな姿へと変貌を成し遂げたことを示すものである。そういうことから、磯貝英夫氏の「この作品における現実の方向性は、ここにほぼ示されている」^(注3)という指摘をはじめ、大抵の批評はこの場面を取り上げている。しかし、もっと注目してほしいのは、それに続く、次の場面である。

食事のあとで、修一がまつさきに立つて行つた。

信吾もうなじの凝りをもみながら立ち上つて、なんとなく座敷をのぞいて灯をつけると、

「菊子、からす瓜がさがつて來てるよ。重いからね。」と呼んだ。

瀬戸物を洗ふ音で聞えないやうだつた。(「秋の魚」五)

「瀬戸物を洗ふ音で聞えない」かつたらしく、菊子は信吾の呼び声に反応を示さなかった。これは今まで一度も見せなかった菊子の姿である。これが何を意味するのか。菊子は以前、「これからは、お父さまのご覧になるものは、なんでも見ておくやうに気をつけますわ。」と言つたことがある。また、右記に挙げている箇所と同じ日の午後、信吾から別居の話がされた際にも、菊子は「もし別れましたら、お父さまにどんなお世話でもさせていただけると思ひますの。」と、「初めて菊子の情熱の表現であるかのやう」なことを言い、信吾をはっとさせている。他にも、信吾と聞いた「佛都七百年祭のお寺の鐘」や「薫の聲」などは一一生忘れませぬわ。」と言つたこともある。

その菊子が信吾に対して見せた初めての無反応である。今後の信吾と菊子の関係を窺わせる最後の一行だったのである。菊子を信州のもみじに連れて行くことが、信吾における菊子からの解放だと読み取れるなら、この最後の一行は菊子における信吾からの自由、自立と読み取ることができないだろうか。だから、信吾が修一から言われて菊子に伝えた「自由」とは、表面的には「結婚からの自由を意味する」^(注4)と解釈できるが、実際に菊子と修一が離婚するかどうかは問題にならないのである。

作中、自立した戦後の新たな女性像を表している「絹子の生きかたを追うかたちで、自立への姿勢を示す」^(注5)のが、娘の房子である。その房子を「私だつてお手つだひさせていただくわ。」と菊

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

子は言い出す。おそらく、中絶した際に保子が言った「今の人はなんて恐ろしい。」という言葉のように、「今の人」である菊子も房子も、絹子と同じく自立した女性の一人として、今後は生きていくのだろう。つまり、菊子における「自由」とは、離婚という問題より、むしろ、妻や女として、いや、一人の人間としての自立という意味において解釈すべきであろう。

このような、著しい菊子の変貌を信吾自身が予想していたかどうかは定かではないが、菊子における強い意志、自立への変貌を窺わせる次のような言葉がある。

テルはこの雨宮のおぢいさんに一番なついてゐた。貸間へ移つてからも、老人はテルを見に来た。

「おぢいさんに早速さう言つてやりませう。安心なさるわ。」と言ふのをしほに菊子は向うへ行つた。

信吾は菊子の後姿を見なかつた。黒い子犬を目で追つてゐると、窓際に大きいあざみの倒れてゐるのに氣づいた。花は失せ、莖の根元から折れながら、あざみはまだ青々としてゐた。

「あざみは強いもんだね。」と信吾は言った。(「島の夢」四)

この場面で、「信吾は菊子の後姿を見なかつた。」とは言うもの

の、菊子が去った後に登場する「花は失せ、莖の根元から折れながら」も「まだ青々としてゐた。」という強いあざみとは、まさしく菊子を指すものではないだろうか。ここでの信吾の「あざみは強いもんだね。」という言う言葉に、作品の結末・信吾と菊子との結末が託されていたと読み取るのは不可能だろうか。

以上のように、菊子は信吾の憧れであつた美しい義姉を思い出させる媒体としての役割をもたされ、登場した。作中では、「腰のまはりなども豊かになつて來」て、身長が伸びるなどの明らかに肉体的変化を見せる唯一の人物であり、修一に愛人がいることを知りながら、「修一が女のところから酔つて歸つたのに、その足を膝に抱き上げて、靴を脱がせてやる」というやさしさと修一を許す心も持っている。しかし、その一方で、愛人がいるからと言って、子供をおろし、夫を拒む強い意志をも見せているのである。すなわち、菊子は義姉の代理者としての抽象的な美を持つと同時に、菊子自身の自立への暗示として読み取れる強い意志の姿も持っている。結果的に、これらの対照的な菊子の両面性は、絶望的な老いではなく、老いを通じて生きていくことを改めて自覚させ、死に逆らえず前向きに向かつていくように、と信吾における老いの意識に変化を持たせることになる。^(注6)

ところでこの菊子という女性は、日常のなかに置いてみる
とき、まことにふしぎな存在である。家事万端行き届いてそ

つがなく、しかもしゃべらせれば機知に富み、美的感覚も敏感である。美しく幼い純粹さを失っていない反面、いじの悪い房子にまでさりげない心くばりを忘れず、人情の機微に通じたところもあって、裕福な家庭の八人兄妹の末っ子として、苦勞なく育ったとはとうてい思われない。それなのに肝腎の夫には愛されず、夫をやさしく介抱するかと思えば、決然として子供を墮して夫を拒絶する自我の強さもある。どうにも統一的な人間像が浮かんでこないのである。^(年)

菊子は、川嶋至氏の「ふしぎな存在で」、「どうにも統一的な人間像が浮かんでこない」という指摘のように、一つ概念に縛られていない人物である。その上、対照的な性質を持っている。だからこそ、菊子は死の恐れで怯えていた信吾を、その老いの中にあつてさえ、生を改めて自覚させるといふ救いができたのだろう。信吾にとって「孤獨のわづかな明り」で、「鬱陶しい家庭の窓」のような存在、ほっとさせる存在である女主人公の菊子である。その菊子に、信吾の永遠の憧憬の美の象徴である義姉を思わせる一面と菊子自身の現実的な姿の一面という対照的な性質は不可欠な要素であつたのだろう。

女主人公に対照的な両面性という性質を持たせ、男主人公を救わせるという設定は、川端の作品世界ではよくあることである。『伊豆の踊子』で「私」を孤兒根性から救う踊子、『雪国』で徒勞

感に陥っている島村を救おうとする駒子がその一例である。それと同じように、『山の音』でも信吾を救う役割を果たしている菊子に、その両面性という手法が使われていたのである。

—三—

引き続き、他の女性人物のことについて簡単に触れておきたい。川端文学のなかで『山の音』ほど多くの女性の人物が登場するのは珍しい。作品のストーリーの流れにおいては、菊子と保子の姉の存在が大事であるけれども、修一の愛人として登場する絹子や事務員だった英子、不器量な娘の房子の存在も作品においては欠かせない。

まず、修一の愛人として登場する未亡人の絹子である。彼女は修一の愛人ということ、「今の修一の女は商賣女か娼婦型の女にちがひないと」といふ信吾の言葉などから、初めはあまりいいイメージで登場してはいなかった。でも、作品が進むにつれ、はっきりとした自分の意志を持っていること、仕事においても能力を認められていることなどが知られ、自立した女性としてのイメージを定着させていくのである。

信吾と会った時の、「やはらかい見かけによらず、絹子といふ女は、信吾を寄せつけなかった。」という描写からも、絹子の意志の強さを窺うことができる。「自由の身」で、「自由に考へよう

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

と」している絹子は、まさしく戦後の新たな女性像を表していると言える。絹子は信吾が会いに行くまで実際の姿を現していない。あくまでも、英子と池田の言葉を通して彼女の意見や考え方が知らされる仕組みになっている。次に挙げている池田の言葉もその一つであるが、そのような方法は絹子の自立性をより強調する効果をもたらすことになる。

「はあ、私もさう思つてゐますから……。」と池田は言つて、「絹子さんの方がえらくて、意見ぢやないですの。私、絹子さんとはずるぶん性格がちがふんですけれど、馬が合ふつていふんですか、未亡人の會で知り合つてから、いつしよに暮すことになつて、絹子さんに力づけられてゐます。二人とも、主人の家を出て、實家にも歸らないで、まあ自由の身でございませう。自由に考へようと言ひ合はせて、主人の寫眞なんか持つてゐたのも、行李に入れてしまひましたの。子供の寫眞は出してをりますけれど……。絹子さんはアメリカの雑誌を、どんどん讀みますし、フランスの辭書を引いて、洋裁のことだけだから、言葉がわづかで、見當がつくつて言ひますわ。そのうちに自分で店を持ちますでせう。再婚も出來たらしよう、二人で言つてますのに、どうしていつまでも修一さんとかかわりあつてゐるのか、私にはわかりませんわ。」

(「蚊の群」一)

その他にも、戦争によって夫を失つた未亡人の立場の辛さを生々しく伝えていく箇所がある。

「英子さんが絹子さんにさう言つても、いい奥さまだから、自分が身をひくといふ女も、今は少うございます。よその人を返すから、自分の戦死した夫を返せ、絹子さんはそんなことを言ひ出しますの。生きて返してくれさへしたら、夫がどんなに浮氣をしたつて、女をこしらへたつて、私は夫の好きやうにさせてあげる。池田さん、あなたはどうか、と聞かれますと、それは夫に戦死された者は、私だつてさう思はないではございません。絹子さんは、私たちは夫が戦争に行つても、辛抱してゐたぢやないの？　そして死なれた後の私たちはどうなの？　修一さんは私のところへ來たつて、死ぬ心配はないし、怪我もさせないで歸すんぢやないの？」(「朝の水」三)

絹子は早口に言ふと、もう涙ぐんだ。

「はたからと言はれたが、私は修一の父ですからね。あなたの子供にも、父はあるはずでせう。」

「ありませんわ。戦争未亡人が私生兒を産む決心をしたんですわ。なにも願ひするわけではないけれど、産ませてやつて

いただきたいわ。お慈悲ですから、見のがしていただきたいわ。子供は私のなかにも、私のものですわ。」（「蚊の群」

二二）

夫が戦死した未亡人の絹子は身ごもったところで、一層「自由」に考へて「自立しようとする意志は強くなっている。磯貝英夫氏の指摘のように、「絹子は、むろん、この生活をよしとしているわけではない。」けれども、「現実の問題として、戦争未亡人の家庭再建のゆめが所詮幻想にすぎないことを感知していればこそ、修一との悪縁を絶てないでいるわけ」であった。つまり、絹子と修一の関係からは「こんな修一でさえ、かけがえのない宝とせざるをえない戦争未亡人の絶望が伝わってくる。」^(注)のである。おそらく、『山の音』は戦後という時代を背景にすることにより、絹子のような自立した女性像を造形することが可能だったのだろう。実際に、『山の音』には信吾一家だけではなく、少し回りに目を向けるとそこには戦争による犠牲者である女性たちがいる。戦争で夫を死なれ、酒癖の悪い修一を通して夫の面影を追う絹子、実家には帰れずに家庭教師をやりながら生活している絹子との同居人の池田も戦争未亡人の一人である。これから述べる事務員の英子も好きな人を戦争で死なれた半未亡人であり、お茶の師匠をやっているという菊子の友達も戦争未亡人だった。

このように、戦争で夫や好きな人を失い、生き残った戦争未亡

人たちは厳しい戦後の社会の中で、生きていくためには自立せざるを得ない切実な状況だったのである。彼女たちの生き方こそ、戦争が生み出した新たな女性像である。その中で、最も自立した生き方を見せているのが、絹子である。すなわち、絹子は戦後の新たな女性像を象徴する先駆者のような存在なのである。

さらに、注目してほしい女性が、信吾の会社の部屋つきの事務員であった谷崎英子である。彼女にさえ、戦後の新たな女性像を窺うことが出来る。が、その前に、意外とこの作品において重要な位置を占めている英子の役割について少し触れておきたい。英子は「これがまた體の薄い、心の軽い娘のやう」で、「なにを考へてゐるか、知れたものでない」人物である。絹子の家を案内した件で、会社をやめて「軽便な娘だと考へてゐた」信吾に、「英子にも小さい良心と善意とがあつたのを感じ」させたりもするが、決してそれほど強い印象を与える人物ではない。

でも、信吾の部屋つきとして勤めていた「その三年のあひだに、英子は修一と踊りに行つたりするのはいいとして、修一の女の家」にまで出入りするやうになり、信吾が「英子に道案内させて、その女の家を見に行つたことさへあつた。」のである。このことは重要である。なぜなら、少なくとも英子が修一と絹子の問題において、信吾一家と深い関わりを持つことを意味しているからである。英子が修一と絹子を別れさせるために、絹子との同居人である池田を信吾に会わせるなど、信吾が思いもなかった行動を

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

取ったりするのが、その証である。その一方では「修一の女を頼つて、同じ店にはいりながら、今日かうして池田をつれて來」るなど、本心の察しのつかない一面も見せている。

確かに、矛盾した行為を見せ、人柄を疑わせる英子であるが、修一と愛人の関係において、彼女の存在が重要であることに変わりはない。実際に、絹子の家を教えたり、池田を信吾に会わせたりするほかにも、「その病院の費用を、修一さんは絹子さんのところから、お持ちになつた」という菊子の中絶の費用のことや、絹子の妊娠といった修一と絹子における出来事を、信吾に知らせる唯一の人物が英子だった。その役目は修一と別れた後の絹子の最新状況が、英子の手紙を通して知らされていることから確認することができる。

だから、英子は信吾に「軽便な娘と考へ」られる一方で、「いやな豫感を感じ」させ、「不吉な豫感」を抱かせる存在でもあったのである。修一と愛人の絹子とのことを、信吾に知らせるのが英子に任された任務であつたわけだが、彼女が信吾に知らせた情報、語り手である信吾を動揺させ、作品の展開にまで影響を及ぼすような位置にいたことを見逃してはならない。つまり、修一と絹子をめぐる信吾一家との関わりにおいて、英子は「物語を展開する重要な役目を世負わさせられている」人物だった。

では、修一との関係においては重要な役割を持つとは言え、矛盾した行為をみせる英子のどこから戦後の新たな女性の姿が窺え

ると言えるのか。それは、英子が自分の任務を果たす際に、信吾に反抗的だと思わせるほど、はっきりとした意見を述べている点である。

「君に迷惑かけて、今日はよさう。」

「どうしてですの、ここまでいらして……。御家庭が平和にさへなれば、よろしいぢやございませんの？」

英子の反抗には憎悪も感じられた。

―中略―

英子の反抗も思ひ出されて來た。毎日そばにゐるが、信吾は英子のあんな爆發を見たことはなかつた。（「栗の實」五）

いざとなつて、英子に絹子の家まで案内させたものの、信吾は絹子の家を目の前にして戸惑いを見せている。その一方で、英子は「御家庭が平和にさへなれば、よろしいぢやございませんの？」と信吾に言い、憎悪を感じさせる反抗を見せている。それだけではなく、菊子の中絶の費用の出所が絹子であつたことを信吾に告げる場面では、よりはっきりそれを窺うことができる。そこでの、「私たちはいやですわ。私たちと身分がちがふんですから」、「身分がちがひますと、それでよろしいんですか。」という英子の言葉は、社会における弱者の立場からの意味深いメッセージとして感じ取れる。特に、「お金を渡す絹子さんも絹子さんですわ。私

にはわかりませぬわ。」という文章と照応し、英子の「私たち」という言葉が重々しく伝わってくる。それは、戦後の女性（正確に言うなら、未亡人と半未亡人のように戦争の犠牲になった女性）を指すのではないだろうか。英子自身が二十代の若さでありながら、戦争により、恋人を失った半未亡人であったことから、十分考えられることである。その他に、英子が「會社をやめることになりましたら、お世話になったお禮に、私が絹子さんに身をひくやうに頼」むことを、自分の「自由意志で決心した」という言葉も見逃せない。

このように、様々な性質を見せ、謎に満ちた性格の持ち主だとも言える英子は、少なくとも修一と絹子をめぐる問題において、無くてはならない存在である。月村麗子氏は英子の存在を次のように、語っている。

こうして物語の展開にとって重要な役を振り当てられる英子は、作中、最もはっきりと変貌する人物であろう。だが、それ丈に、その変化に多少、無理を感じないわけではないが、この変化が、更に後述するように信吾の英子を観る態度の變化としても描かれていることに注意したい。英子の變貌は、筋のためだけのものではなく、それは、『山の音』の主題の積極的表現のためにも重要なのである。第十一章、「都の苑」の四での、信吾と英子との對話は、「やあ。きれいになった

ね。花なんぞ持つて」（四二四）ではじまり、訪ねてきた英子が、菊子の中絶の費用を修一が絹子に出させたのに義憤を感じ、涙ぐむのを見て、信吾は、「英子の良心と善意とを感じ」、自らの無神経を反省する。そして、「英子が残していった深紅のばら」を、信吾はぼんやりながめてい（四二六）。ここでの「ばら」と英子の取り合わせは、英子を主題の上で、ぐっと、菊子に近づけている。（註）

月村氏の、作品における英子の重要性の指摘には同意見であるが、彼女の「菊子に近づけている」という指摘には少し疑問を感じる。むしろ、英子の変化は戦争の半未亡人である英子が、自由で自立していく証だったのではないか。『山の音』は菊子が自由で自立した女性としての生き方を選ぶことが暗示される形で終わっている。言い換えれば、それは房子と同じく、菊子も絹子のような自立した女性を目指すということを意味する。だから、英子を「菊子に近づけている。」というより、絹子に近づけていると解釈した方が適切ではないだろうか。

最後に、房子のことについて簡単に述べたい。房子は信吾の憧れの「保子の姉に似て美人になつてくれないか」というひそかな期待を裏切り、失望させた上に、「母親よりも醜い娘になつてた」という。次の保子の言葉から読み取れるように、親の信吾と保子からもあまり好かれていないようである。

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

「それはね、お父さまにお氣に入りの、菊子もゐますから。でも、菊子は別にしても、ほんたうのところ、私もいやはいやです。菊子がなにか言つたりしたりすると、ほつと氣の輕くなる時もあります。房子だと氣が重くなつて……。嫁にやる前は、それほどでもなかつた。自分の娘と孫にちがひのないのに、親もかうなるものなんでせうか。恐ろしい。あなただの感化で。」（「雲の炎」二）

「不器量」で「ふびんな」房子は、夫から「お父さんがお前を可愛がらなかつたから、お前は性質が悪いと」言われ、弟の修一からも馬鹿にされている存在であつた。でも、「心の負傷兵」の夫を持つ菊子とは違った意味で、戦争による犠牲者の一人である。夫の相原は、戦争には行つてないが、麻葉の密賣の手先に使われ、「自分が麻葉のとりこになつて」しまい、心中事件を起こす。破滅していく相原の姿は、まさしく戦後の不安な世相が生み出したものである。その房子も、作品において重要な役割を果たしている。

まず、その一つは、菊子との関係においてである。醜くてふびんで、不器量な姿で描かれている房子の存在は結果的に、菊子の存在を一層引き立てる働きをする。それに、菊子の変化を明らかにさせるきっかけを与えたのも房子である。最後の場面で水商売

のことを言い出したのは房子であり、彼女のその発言をがきっかけに、菊子が「私だって手伝う」とか、「女なら誰でも水商売ができる」という言葉を口に出したのである。その他に、「特に強い精神的連帯を持つ舅と嫁に対する批判者としての役割も果たしている」^(金江)ことが分かる。だから、「信吾が菊子にやさしくするのは、修一や保子は勿論、菊子もよく知つてゐて、誰も改めて口に出さないことなの」に、房子は「お父さまは、菊子さんにやさしくていいわねえ。」と言つたりする。作中で唯一、菊子を厳しい目で見ている人物が房子であつた。

もう一つ、欠かせない房子の役割がある。それは、「山の音」を聞いたと話す場面で、菊子が保子の姉の存在を読者に知らせたとするなら、房子は彼女が最初の出戻りの際に持ってきた風呂敷を通して、義姉の象徴である紅葉のことを持ち出すきっかけを提示している。その風呂敷がきっかけとなり、義姉をめぐる信吾と保子の心境が明らかにされることは、作品の展開において重要である。

そして信吾はふと思ひ出したやうに、

「このあひだ、房子が持つて來た風呂敷ね。」

「風呂敷？」

「うん、風呂敷。あの風呂敷は見覚えがあつて、思ひ出せなかつたが、うちのだらう。」

「木綿の大風呂敷でせう。房子が嫁にゆく時、鏡臺の鏡をつつんでやつたぢやありませんか。大きい鏡でしたから。」

—中略—

「もつと古いんですよ。義姉の形見なんでせうね。義姉が死んでから、植木鉢をつつんで、實家へ返して來た風呂敷ですから。大きいもみぢの盆栽でした。」

「さうかね。」と信吾は静かに言つたが、みごとな盆栽のみぢのくれなるが、頭いつぱいに照り明るんだ。（『雲の炎』
二）

—四—

『山の音』のモチーフには、信吾の老いという内面的問題と信吾一家に起きる家庭内問題が中心である。その中に、登場する多くの女性人物は、それぞれにちゃんと役割が任されていたのである。女主人公の菊子には川端文学の特徴の一つである女主人公における両面性が持たされ、彼女は信吾を救う役割を果たしながら、自分も自立した女性へと目覚めていく姿があった。その他には、自立した女性像の持ち主の絹子、修一と絹子のことにおいて重要な役割を果たす英子、信吾夫婦と保子の姉とのかたちを知らせてくれる房子、それぞれに託されている彼女らの役割について述べてみた。数多い女性人物の構成と働きにより、作品世界は一層奥深

くなっていくのである。

注1 『山の音』は、全十六章の構成で『雪国』や『千羽鶴』と同

じく、一篇ずつ各雑誌に断続的に発表したのをまとめて出来上がった作品である。そういう成立方法により、最後の第十六章の「秋の魚」までには、昭和二十四から昭和二十九年までの約五年という時間を要した。

注2 川嶋 至 『山の音』の人物論

『川端康成研究叢書6 風韻の相剋 山の音・千羽鶴・波千鳥』 川端文学研究会編 教育出版センター 昭和五四・九

注3 磯貝英夫 『山の音』における家庭

『山の音』の分析研究』 長谷川泉・鶴田欣也編 南窓社

昭和五五・一二

注4 前掲論文（注3）

注5 前掲論文（注3）

注6 主人公の尾形信吾における老いの問題については「新樹」第十四輯（梅光学院大学、平成十二年一月）の『山の音』の研究—老いの問題を中心に—で詳しく述べている。

注7 前掲論文（注2）

注8 前掲論文（注3）

注9 磯貝英夫 『山の音』と『千羽鶴』

『現代エスプリ 川端康成』 長谷川泉編 至文堂 昭和四五・四

注10 月村麗子 『山の音』の作品構造

『山の音』に描かれている女性たち—菊子の両面性を含めて—

『山の音』に描かれている女性たち―菊子の両面性を含めて―

『川端康成研究叢書6 風韻の相剋 山の音・千羽鶴・波千

鳥』川端文学研究会編 教育出版センター 昭和五四・九

注11 前掲論文(注2)

☆ 本文引用 『川端康成全集』第十卷 新潮社 昭和五五・四